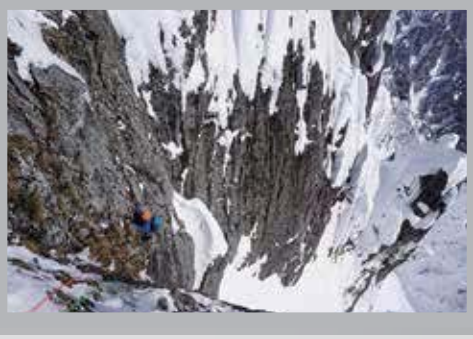
JMSCA 登山月報 第619号 令和２年10月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

チョング・クムダン(7,071 m)



第33回リードジャパンカップ2020盛岡 …… 2
第143回 Mountain World …… 6
新連載 Enjoy Climbing …… 7
コロナ禍の中で、その後で（その2） …… 8
第17回山岳遭難事故調査報告書（2） …… 9
スポーツ団体ガバナンスコード（3） …… 12
ＪＭＳＣＡ、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 12

No.619

第33回リードジャパンカップ2020盛岡

大会名：
スポーツクライミング
第33回リードジャパンカップ
会　場：
岩手県営運動公園
スポーツクライミング競技場
日　程：
８月 ９日　予選男子
８月10日　予選女子、
　　準決勝男子
８月11日　準決勝女子、
　　決勝男子・女子
選　手：男子51人、女子47人

３月上旬開催予定だった第33回リードジャパンカップ（以下、LJC2020）は、COVID-19の流行により、４月11日～12日へ延期。しかし、４月７日に政府より緊急事態宣言が発出され開催地、時期、未定のまま再延期となった。

実行委員会としては、自粛期間中今後の大会の再開を確実にするために、「ＪＭＳＣＡ大会開催・運営新型コロナウィルス感染防止ガイドライン（以下、ＥＯＣＧ）」を策定。これは、政府やＩＦＳＣのCOVID-19対応ガイドライン、他競技団体の対策を基に策定した。

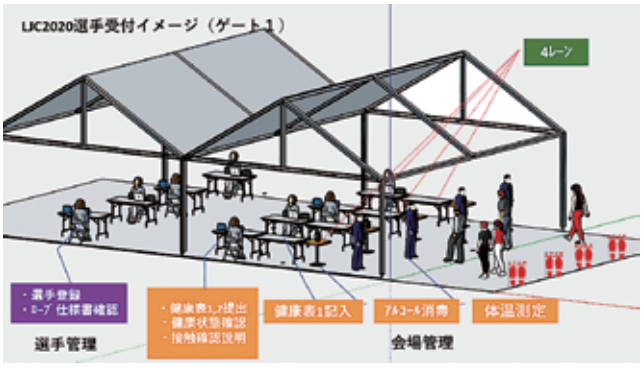
その中で、大会の開催はCOVID-19感染症が終息または、次の条件を満たすことができれば可能とした。

⑴COVID-19緊急事態宣言、社会生活の自粛要請等が解除されていること。
⑵大会運営において、COVID-19感染症の感染防止対策を遵守できること。
⑶治療薬（治療法）ができていること。
⑷開催地の県市町村、会場施設、県岳連・協会の同意が得られること。
⑸宿泊、交通機関が十分確保できること。

＊ＥＯＣＧ：下記リンクより確認いただけます。

https://drive.google.com/file/d/1m2_OLxedN9vsEdjy6TH_9EDBnudn8FIJ/view?usp=sharing

そして一日の感染者が減少、第一波の波が底となった５月25日、緊急事態宣言が解除され、本格的に再開に向けて開催地の検討を開始。上記の条件以外に、３密防止、換気条件（30㎥／人・時）のクリアなど細かな基準を設け、屋外の施設を中心に開催地を絞り込み、いくつかの施設に打診した。スケジュールやCOVID-19の状況により開催は難しいとする施設が多い中、前向きに検討頂いたのが岩手県、盛岡市でした。実行委員会含め、フェイスシールドのテストなど現地での調整を２回実施。そして、ＥＯＣＧを基に会場に合わせてCOVID-19対策を具体化していった。



大会は無観客、帯同者の制限、メディアの１社１担１名など入場者の削減を図り、会場に来場するすべての人（選手、スタッフ、協力業者、メディア）の健康チェック（２週間前）、当日の検温、マスクの着用（選手競技中、熱中の恐れがある場合除く）、手指消毒、ロープの自前使用、日程の延長（２日→３日）など健康管理、３密防止、物品の共用削減など感染防止策を徹底しました。

初日は、大雨で気温20℃前後、２日目からは33－35℃の猛暑となり、ＷＧＢＴが一時30℃を超える時もあり医療班とともに熱中症についても急遽対応を強いられる展開であった。

体温測定

健康チェック記入

Report１　競技

８月９日（天気　雨　気温20℃　湿度100%　風６南）

予選男子：前日からの雨となり、競技中30分毎にルートのクリーニング（水のふき取り）を行いました。終了は約１時間半押しの15時を回るほどの大雨。ルートは、ジャミングの箇所が多く、不得意な選手、雨の影響もあったかＡルートは完登ゼロで16人が35＋で並ぶ。Ｂルートは楢﨑智亜が唯一の完登で予選を１位通過する。

８月10日（天気　晴／曇　気温33℃　湿度64%　風４西）

予選女子：野口啓代が両ルートを完登したが、あとはＡルートで野中生萌、Ｂルートで森秋彩が完登しただけ

の予選としては厳しいルートだった。

準決男子：前日の予選同様の厳しいルート。予選上位の選手が敗退する場面も多くみられた。結果、予選13位であった西田秀里が35＋の１位通過。続いて藤井快が２位。楢崎智亜は５位で決勝へ進出した。

８月11日（天気　晴　気温34℃　湿度60%　風４西）

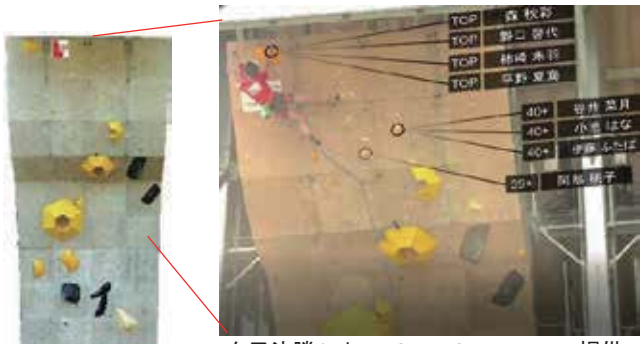
準決女子：かなり蛇行する手数の多いルート。森秋彩、谷井菜月が完登。野口啓代は高度49＋で３位、伊藤は47＋で７位となり決勝進出を決めた。野中は高度44＋で13位となり準決勝で敗退となった。

男子決勝：グレード５.13ｄ／14ａ。ほぼ最大傾斜にセットされたルートで、中間部から上部に移るダブルダイノが核心となった。１人目の吉田智音が、迷いないムーブでＴＯＰに迫る36＋、続いて２人目の田中修太も36を獲得。最初からトップに迫る状況で、後半完登が続出するのではと思うほど。ただ現実は違った。３番手の緒方良行は、中間から上部に抜けるダブルダイノで失敗。続く、楢崎智亜はここをクリアし２人に迫るが体勢を崩し35＋でフォール。その後、ＬＪＣ上位の常連が続くがダブルダイで失敗し28＋に終わる。最後に準決勝で確実な登りで１位となった西田秀聖が登場。ここでもほぼ安定したムーブで完登。奈良県選手のワン・ツーフィニッシュが決まる。

男子決勝ルート　＊OnlineObservation　提供

西田秀聖

決勝女子：グレード５.13ｂ／ｃ。女子決勝は選手の動きを見ている限り下部、中部は比較的登りやく感じ、上部の数手が細かいホールドになりここが分かれ道。ここで完登する選手と高度40前後でフォールする選手に分かれた。１人目の平野夏海、４番手の柿崎未羽、野口啓代が完登。最後の森秋彩も、余裕の登りで完登し４人が並ぶ。カウントバックで森秋彩が優勝、野口啓代は惜しくも２位に終わる。また、地元の伊藤ふたばは、ＢＪＣ2020、ＳＪＣ2020と２冠を達成し、ＬＪＣで優勝し３冠を期待されていたが７位に終わった。



女子決勝ルート　＊OnlineObservation　提供

森秋彩

表彰台の風景として感じたのは、野口啓代以外は10代でありこのコロナ禍、調整が難しかったことも年齢によってはあると思うが10代の選手が一気に躍り出た。今まで決勝の常連で予選７位の是永敬一郎、予選２位の本間大晴が準決勝敗退。女子においても予選２位の野中生萌が準決勝敗退。もともと大会によって入れ替わりの激しいスポーツであるが、コロナ禍において世代交代？　が見えてきた。

今大会は、大会は入場制限や大会２週間前からの健康管理、会場での検温やマスクの着用などできる限りの感染対策を徹底した。コロナ禍において、野球やサッカーなどプロスポーツを除いて、日本のトップを決める大会としては各競技団体のなかで最初の開催になった。無観客での開催としたが、YouToube、スカイＡ、SPORTS BULLでライブ放映が行われ久しぶりの大会だったこともあり、多くの反響を頂いた。視聴がリードでは決勝で２倍ほどであった。この大会を無事終了できたことは、他の競技含めこれからのイベント開催に向けて一歩踏み出せたと感じている。

特に知事、市長の観戦をいただくとともに、県、市の全面協力を頂き成功裏に終えることができました。改め

て岩手県、盛岡市、施設、選手、協賛、協力業者、スタッフのみな様お疲れ様でした。

岩手県知事、盛岡市長観戦

大会スタッフ

Report 2　COVID-19対応

1．COVID-19備品

①アルコール

- 手指消毒アルコール（ジェル）2.5 L
- 手指消毒アルコール（液体75%）5.5 L
- 手指、デバイス消毒アルコール(液体75%)1.5 L

➡16か所配置　約７Ｌ使用

②次亜塩素酸

0.2%７Ｌ→0.05%水溶液

➡競技使用後　マット、床の消毒掃除

③フェイスシールド 約75個

④ビニール手袋500枚

⑤雑巾 150枚（いちど洗濯）

⑥ハンドソープ（施設の物があったため設置せず）

⑦ペーパータオル 800枚

⑧飛沫防止シート ６枚　120ｃｍ ｘ 80ｃｍ

⑨非接触体温計（６台）　運動公園よりレンタル

⑩接触体温計（腋窩式　医療班１本）

＊熱中症対策備品

①ＷＧＰＴ温度・湿度計

②扇風機（10台、スポットクラー１台）

③ファン付きウェアー（ビデオジャッジスタッフ用）

④氷（医療班）

2．健康チェック

２週間前、大会当日、検温、体調確認実施。

体温37.５℃以上、体調不良が続く、COVID-19感染者との接触の可能性がある場合は会場入場禁止（競技参加不可）とした。非接触の場合、環境に影響されるため接触式による測定を実施。（体質による対応に関しては、医療班によるヒアリングにて確認）

3．ロープ　選手持参使用

ロープを共用することからの感染の可能性は不明だ

健康チェック表

が、リスク管理より、今大会は選手個人のロープを使用。条件としてＰＳＣ、EN892、ＵＩＡＡに適合していることとし径を9.0～1.0とした。今回切断はOKとしたが、品質の保証としては要検討。

大会最終日から２週間が経過した８月26日。選手、スタッフ、この大会に関係した方からの新型コロナに関する感染等の連絡、情報はありませんでした。ここに大会が無事終了したことを報告いたします。

（実行委員長　村岡正己）

Report 3　スタッフコメント

テクニカルデリゲイト　羽鎌田直人

約半年ぶりの全国大会となった今回のＬＪＣでは、新型コロナウイルス感染症への対策はもちろんのこと、競技関係スタッフの活動内容のマニュアル化およびシフト制導入を試みた。以前よりスタッフの有志が選手管理（選手受付やアイソレーションゾーン等）に関連するマニュアルを作成していたが、今回はウォームアップエリアが複数に分かれること、感染症対策で通常よりも活動内容が複雑であること、開催地スタッフの経験値にばらつきがあることなどから、より詳細な活動内容を記したマニュアルをマネージャー、リーダーと共に作成した。さらに、選手との接触回数を減らすため、また熱中症リスクを避けるために定期的に休憩を取ることができるようシフト制を初めて導入した。朝早くから夕方遅くまでの活動というのはある意味クライミング大会の風物詩ではあるものの、選手のアイソレーションへの拘束時間を極力減らすようＩＦがルール変更を重ねてきたように（例：予選方式をオンサイトからフラッシュに変更）、次のステップとしてはスタッフの負担軽減にも積極的に取り組んでいく必要があるだろう。オリンピックのテストイベントの際に、複数の競技を担当している組織委職員から、「スポーツクライミングのボランティアスタッフは一人ひとりの活動内容への理解度と専門性が非常に高い」と驚かれたが、これはそのスタッフだけでなく競技団体に直接経験値が積み重ねられているという意味では非常に喜ばしいものの、裏を返せばその経験値の次世代への継承を常に意識しなければその瞬間にこれまでの経験や知識が消え去るという危険な側面でもある。クライミング大会に関わることが面白いと思っていただけるような、そういった環境づくりもこの競技の持続可能性に必要な視点である。

アシスタントテクニカルデリゲイト　杉山将崇

新型コロナウイルスの影響で延期に延期を重ねたＬＪＣを開催できたことを心から嬉しく思います。その為に検温やソーシャルディスタンシングの確保、濃厚接触を避けるための工夫が沢山行われました。その結果、今までのコンペでは考えていなかった余分な時間も必要となり、スケジュールを少し延ばすことに繋がりました。新しいコンペスタイルを確立するには、もう少し回数を重ね、試行する必要がありそうです。

例えば、ロープの末端を触らない為にロープを引き抜くスピードが格段に遅くなったり、選手誘導に時間がかかるなどしました。

もう一つ、今回の反省点はホウ・レン・ソウを大切にするという基本的事項です。新型コロナ対策に気を取られることで、本来であれば問題にならなかったようなこともつい忘れがちになります。今回でいうと、地元のホールド使用についてがそれにあたる。その為、セッターは夜中まで連日作業することとなった。

このような新しいコンペスタイルを試行するにあたって、問題は新しく出てきます。しかしながら、選手の熱い登りと、競技後の今までの鬱憤を晴らす清々しい顔を見ると、やはり今のクライミングシーンにおけるコンペの役割は本当に壮大なものであると再認識しました。これからの時代の大会を、より素晴らしいものにしていくためにも、あらゆる方面からの協力が必要不可欠であるのは言うまでもなく、世論のマインドセットも課題となるでしょう。

一般社団法人岩手県山岳・スポーツクライミング協会
会長　吉田春彦

村岡さんから３月から延期になっているリードジャパンカップを岩手で開催できないかとの連絡があったのは、５月中旬であった。コロナ禍で５月開催予定のコンバインドジャパンカップも延期になっていて、県や市の大きなスポーツイベントは中止を余儀なくされていた。新型コロナウイルスの感染状況も踏まえ岩手県、盛岡市と協議を続け、６月にやっと開催表明できることになったが、当時コロナ感染者がいない岩手で開催していいのかとの心配をよそに、知事の感染者を責めない宣言のもと開催を許諾して頂いたことで事態は動き出した。更に、予算がなくても人員と物品の提供などに尽力していただいた盛岡市、会場管理の岩手県スポーツ振興事業団のご理解のもと開催できた事は、ＪＭＳＣＡ、スポーツクライミングの将来を担う選手達にとっても貴重な大会となった。この間、ＪＭＳＣＡと県山協、岩手県、盛岡市とのメールや電話は数知れない。７月下旬に岩手でコロナ感染者が発生しても、県はそれなりの対策をして行うのは構わないとの判断であった。その間、県協会は小山副会長を中心に大会準備にあたり会場レイアウトや競技役員の確保などを進めてきた。コロナ感染対策のため７月27日から県内役員は毎日検温し健康チェック表の記載と感染確認アプリ cocoa を確認した。

やっと迎えた初日は、「岩手の大会は雨」のイメージ通り雨で会場入口は池になったもののクレームもなく無事終了。２日目、３日目は選手達から観客の声援がなく寂しいとの声も聴かれたが、30度を超す炎天下で、マスクとシールド、手袋着用で選手だけでなく競技役員の熱中症も心配されたものの、市提供の水と氷、更には散水等でしのぐことができた。ＪＭＳＣＡの皆様の緻密な計画のもと、万全なコロナ対策を行ったうえで大会を終えることができたことに感謝するとともに、アジア選手権返上の代替えのコンバインドジャパンカップは延期になったままで、８ 月26 日のＣＡＳ裁定次第で開催時期が変わるようであるが、岩手県、盛岡市との約束を果たせるよう、そして従来のように多くの歓声の中で選手たちが力を発揮できる日が来ることを願っている。

Report 4　マーケティング

1．入場数

８／ ９	選手51、スタッフ87、業者20、メディア43、ＶＩＰ２	計201
８／10	選手73、スタッフ81、業者20、メディア49	計223
８／11	選手34、スタッフ78、業者36、メディア57、ＶＩＰ13	計218

2．クリッピング

・新聞	８／８－８／12　38
・Ｗｅｂ	８／９－８／12　103
・ＴＶ	８／９－８／11　13番組（放映時間23分46秒）
・Youtube 視聴数　決勝	ライブ1,500回、24時間15,000回、２週間38,800回

第143回 Mountain World

エヴェレストのレジェンド アン・リタ逝く

池田常道

ギネスブックから贈られたエヴェレスト無酸素登頂証明書を手にするアン・リタ

1983年から96年にかけてエヴェレストに10回登るなど、当時の最多記録を打ち立てたアン・リタ・シェルパが9月21日、72歳で亡くなった。

1979年から82年の間に4回ダウラギリに登頂し、83年にアメリカ隊でエヴェレストに登ると、96年までに10回の登頂を繰り返した。このうち9回は無酸素だった。すべて無酸素だったと言われているが、83年のときは、ラリー・ニールソン（米）の無酸素登頂をサポートするために、デヴィッド・ブリーシャーズと酸素を分け合ってサウスコルの一夜を過ごしたと、撮影に当たったブリーシャーズが証言している。

エヴェレストではサウスコル～南東稜、南稜～南東稜、ノースコル～北東稜に足跡を印し、87年12月には韓国のホ・ヤンホと冬季無酸素登頂を果たした。96年はロブ・ホールとスコット・フィッシャーという公募隊リーダーが亡くなった、呪われたシーズンで、アン・リタも多くの知己を失ったうえに、遠征後長引く肝臓疾患を抱える身になった。高所登山から引退する前、エヴェレストのほかにダウラギリ（4回）、チョー・オユー（4回）、カンチェンジュンガ（1回）に登っている。

1948年にターメで生まれ、ヤクを世話したりチベットとの交易でポーターを務めたりした。79年春、グレゴリオ・アリス隊長のスペイン隊で初めて遠征隊に雇われ、4隊員と共にいきなり頂上に立った。ダウラギリには翌年のスイス隊で2回登頂し、82年のベルギー隊でも頂上に立ったが、翌年秋に「梨」ルートに挑んだアメリカ女性隊ではC2が雪崩に襲われて1隊員を失って敗退を喫し、自身の5回目は成らなかった。

＊

公募隊を率いて9回エヴェレストに登ったジョージ・ダイマレスク（米）も9月、59歳の生涯を閉じた。前夫人のラクパ・シェルパがフェイスブックで明らかにしたもので、死因はがんだったという。遠征登山の世界では、生前のアンビバレントな性格のゆえか敬遠されがちで、その死も故国ルーマニアの一部メディアが報じただけだった。

1961年にルーマニア南西部のトゥルチネスティに生まれた彼は、兵役についていた25歳のとき、共産主義者の支配する故国を捨て、ドナウ川を泳いで旧ユーゴスラヴィアに入り、イタリアを経由してアメリカに渡った。ファーストネームも東欧風のゲオルギーから英語のジョージに変えた。

建設作業員として働いていた1998年、アジアン・トレッキングのエヴェレスト北面登山公募隊にインディペンデントとして参加し、7700mで敗退に終わった。翌年には公募隊隊長として登頂に成功すると、2007年までに9回連続で登頂を繰り返した。そのうち2000年は無酸素で頂上に立っている。K2にも何度か挑んだが、ついに登頂は果たせなかった。

遠征でめぐり合ったラクパ・シェルパとは12年間にわたって連れ添ったが、最後に別れがきた。ラクパはダイマレスクとの山行で、女性では最多のエヴェレスト登頂回数を刻んだ。「いいことも悪いことも、私たちはすべて分け合った」そして、「どうか安らかに」。

エヴェレスト頂上に立つダイマレスク（左）とラクパ・シェルパ

新連載

Enjoy Climbing

アルパインクライミングの入口

石川貴大

どんな山がやりたいのか。そう問われても、はっきりとした答えを出せないでいた。私は登山を始めて５年になる。一般的にみても決して経験が多いとは言えない。だが、ここにきてようやくアルパインクライミングの入口に立ちたいと思うことができた。

私は、社会人になってから登山を始めた。登山を始めたのは25歳の頃だ。始めてすぐに山の世界に魅了された。しかし、最初の３年間は仕事の兼ね合いで山に入れたのは月に１～２回。山の経験は高校山岳部や大学山岳部など、学生の頃からがっちりと山に入っているクライマーには到底及ばない。強いクライマーに会う度に経験の差を突き付けられた。歩いた山の数、登った壁の数は絶対的に少ない。人と比べても仕方がない話なのだが、長年の経験者との埋めがたい差の様なものを感じてしまっていた。

２年前に前職を辞めリバーガイドに転身してからは、空いた時間を見つけては山に入るようになった。自分に足りないものは経験。短い時間で出来る限り濃い経験をしようと考えた。まず、海外での高所登山を考えた。静岡県岳連のエルブルース遠征に参加させてもらい高所登山がどんなものかを経験することにした。初めての海外登山は全てが新鮮で、外に目を向けることの面白さに気づかせてくれるものだった。

また、エルブルース遠征の前後で良い出会いが続いていた。遠征前の2018年海外登山技術研究会の際に当時ＪＭＳＣＡの海外委員長だった澤田実さんを紹介してもらった。そこでクライミングが強くなりたいという事を伝えると、その場でヨセミテ・インターナショナル・クライマーズ・ミートへ参加することが決まった。さらにその流れで翌年はカザフスタン・トラッドロッククライミング・フェスティバルにも参加することができた。これらの経験は良い刺激になり、山に対するモチベーションがどんどん上がっていくことになった。

しかしながら、その１年はほとんどの時間をクライミングに費やしていた為、冬山の経験をあまり積めずにいた。特に、興味のあった冬期登攀はほとんど行けておらず、素人同然だった。だから、次はそれが課題だと思った。そんな中2019年の秋、花谷泰広さんの主導する

穴毛谷での登攀

ヒマラヤキャンプの存在を知った。ヒマラヤに向けてのトレーニングは当然ながら冬が中心だ。冬の山岳経験が積めて、さらに憧れでもあるヒマラヤ登山ができる。これは私にとって魅力的に感じられた。すぐに参加の意思を表明した。ヒマラヤキャンプでの活動が始まると同年代のメンバーと毎週のように山に入ることができるようになった。こういった仲間と出会える場を見つけることができただけでも大きな収穫だった。そのおかげもあり、今までパートナーが見つからず行けていなかったアイスクライミングや冬期登攀も始めることができた。

冬期登攀をやるようになると、その魅力にどんどん惹かれるようになっていった。もっともっと冬壁の経験を積んでいこう、と考えるようになったのだ。そんな時、増本亮さんからウインタークライマーズミーティングの案内を頂いた。増本さんとは2019年の海外登山技術研究会でお会いしていて、その時にウインタークライマーズミーティングに興味があるという事を伝えていた。それを覚えていてくれていたのだ。私のような、名もないクライマーを覚えてくれていた事は純粋に嬉しかった。とはいえ、参加にあたり冬期登攀の実力が足りているのか不安ではあった。ただ、それでもこれは次に繋がるチャンスだと思って参加させて貰うことにした。

2020年の会場は北アルプスの穴毛谷だ。今までの自分の経験にはない環境的なリスクの高い場所。緊張気味に当日を迎えた。当日は、鳴海玄希さんとパートナーを組ませてもらい、二の沢奥壁左峰岩壁を登った。ライン取りや、プロテクションの判断、雪の処理、多くを学べる素晴らしい時間になった。憧れの世界で活躍する鳴海さんと登れたこと、自分の中では難しい壁に挑戦できたこと、本当に楽しい時間だった。そして、これまでにないくらい充実感のある１日だった。自分がやってみたい山はこういう山なんだということを実感した。そこでこれからはアルパインクライミングを目指していきたいと思った。やっと入り口を見つけた。そんな気がし

たのである。

この２年の経験は私にとって非常に濃いものだった。改めて思ったことは、やりたいことは口に出すという事だ。それが、次の良い出会い、次のステップに繋がるのだと思う。まだまだ経験の浅い部分が多いという事に変わりはないが、やりたいことはどんどんやっていきたいと思っている。次に控えるヒマラヤキャンプでの未踏峰登山など、さらに経験を積んで、自分のチャンスを広げていきたい。そして、いずれはアルパインクライミングで大きな山に挑戦していきたいと考えている。今はまだ、ほんの入り口かもしれないが、小さくまとまらずに外へ目を向けていきたいと思う。

石川貴大（いしかわ たかひろ）
1989年９月30日生まれ、31歳
所属クラブは、静岡エクスペディション・クラブ
職業は、リバーガイド・登山ガイド（ＪＭＧＡ登山ステージⅡ）

コロナ禍の中で、その後で（その2）

（一社）大阪府山岳連盟会長　**飛田典男**

前号では、新たな会員獲得の一つとして知識と技術の伝承について私見を述べさせていただいた。この試みが即新たな会員獲得に結び付くとは考えられないが地道な努力に相当な時間を費やさなければならない。

そこで、並行して次善の策を考えなければならないが、その前に、現状の会員の声が傾聴されてきただろうか。十分に聞き届けられていたとは思われない、何故か、それは、ＪＭＳＣＡの理事の実態に如実に表れている。47都道府県＋高体連（48名）＋理事（23名）－重複者（７名）の64名である。（2020年定時総会）23名の理事の半数はスポーツクライミング（以下、ＳＣ）関係者であり、理事会で審議される事案の多くはＳＣ関係のものである。この理事会に全国会員の声が反映されるであろうか。ましてや、予算額の九割までがＳＣで締められている中で、会員の大多数を占める登山関係者の存在感は希薄である。先日の定時総会でも質疑の大半はＳＣの巨額損失関係で終始していた。このＪＭＳＣＡの存続にも係わる危機的事態に対する質疑が近畿ブロックと東京のみであり、全国の会員はＪＭＳＣＡに対して無関心なのかと落胆もさせられた。この原因は何であろうか、全国の会員の無関心さは、これらの声に耳を傾ける機会が無さ過ぎるのである。

唯一、毎年２月に開催されている全国理事長会議が声を聴く機会らしきものである。しかし、ここでも大方はＳＣ関係の報告が主体であり、全国の登山関係者の声が傾聴されているとは言い難い。

これを解消する手段として、ＣＯＶＩＤ19の副産物として登場したリモート会議での登山関係者の意見交換の場を提案したい。その都度、足を運ぶ時間と費用の無駄が解消でき、全国の会員の生の声を聴くことができる。この声を如何に理事会に反映させるかの道筋を構築していただきたい。ガバナンスの観点から「全国登山諮問委員会」とでも銘打って理事会で承認していただければと愚考する。会員のニーズを把握することなく、目先の動向に目を奪われていては、会員との意識の乖離は拡大するばかりである。

ＪＭＳＣＡの会員の大多数は山を愛する登山者であることが忘れられている。それなら、これからの日本の登山をけん引する主体は、誰なのか、どの部、どの委員会なのだろうか。登山の未来像を考え、あるべき姿を模索する主体はＪＭＳＣＡの理事会である。登山とＳＣが組織の両輪と掲げていながら、山積している登山関係の諸問題が取り上げられ語られていない。全国の会員が疲弊している現実にＪＭＳＣＡは適切に手を尽くしてきただろうか。確かに、会費徴収への配慮や共済会還付金及び支援事業への補助金支給等の施策が行われてきているが、これらを活用できない会員も多いのが現実である。今、47都道府県という枠組み自体が崩壊の危機にある。47都道府県で会員数が10団体を下回るのは12県と25％強の現状（2019年度名簿）である。勿論、団体数のみで組織を推し量ることはできないが、将来的に47都道府県の幾つかが欠けることが予測される。

組織は、ヒト・モノ・カネと良く言われる。その中でヒトの継続的な確保が困難な状況が現出している。また、財政的も足元の大阪に目を転じてみるとコロナ過で財政の源である事業のほとんどが中止となり、マイナス予算を定時総会で承認いただいたところである。事業収入に頼ってきたことで、会費収入だけでは事務所の維持さえもできない窮地に陥っており、事業継続の支援金給付を申請しているところである。これらは事業に偏った成長モデルの終焉であり、新たな収益源の模索、組織の整理や事業の在り方をドラステイックに行えるか否かにかかっている。我々の活動の原点である使命に照らして将来のあるべき姿を次回に考察してみたい。

（つづく）

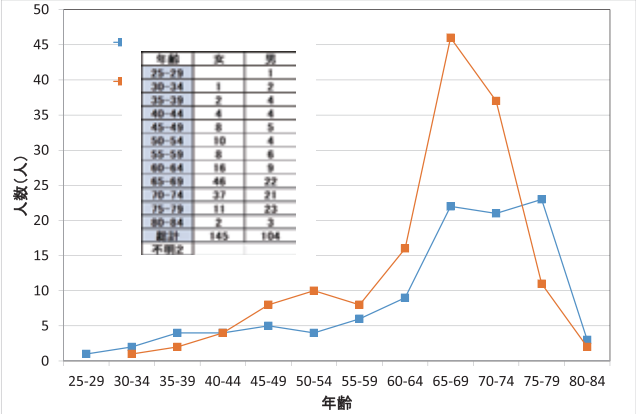
第17回山岳遭難事故調査報告書（2）

山岳遭難事故データベースからの解析　新規登録251人の特徴

2020年６月現在、事故データは新しく251人分が登録された結果、3,968人となった（ＪＭＳＣＡ90人、労山132人、ｊＲＯ29人）。

◎総データ数：３,968人

◎EXCEL使用セル数：２,726,703cells



年齢	女	男
25-29		1
30-34	1	2
35-39	2	4
40-44	4	4
45-49	8	5
50-54	10	4
55-59	8	6
60-64	16	9
65-69	46	22
70-74	37	21
75-79	11	22
80-84	2	3
総計	145	104
不明2		

新規登録された251人は、図のように60～75歳までの女性が突出する。この世代では、ＪＭＳＣＡ、労山ともに女性事故が多くなっている。なお、ＪＭＳＣＡでは、この世代において、女性側の会員が多く登録されている。総務省では、登山団塊同様、登山者の昭和17年（78歳）～26年（69歳）を最も行動者率が高い世代としている。

IIC	1軽症		2中症		3重症		4重体		5死亡		6即死	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
25-29									1			
30-34	1	1			1							
35-39	1		1		1	2					1	
40-44	1	1			3	3						
45-49	1			3	2	5	1				1	
50-54	1	3		3	2	2		2	1			
55-59		1	2	1	4	5		1				
60-64	1	2	1	3	6	11	1					
65-69	2	12	7	9	7	24	3	1			2	
70-74	2	10	5	9	11	16		1	2		1	1
75-79	3	2	5	2	10	5	3	2			2	
80-84	1	1			2			1				

IIC	女	男
1	33	14
2	30	21
3	73	49
4	8	8
5		4
6	1	7

今回、IIC（７段階の障害程度分類）による障害程度は、男性と女性との登山行動の違いを明確示している。IIC５，６の志望者は12人中、女性が僅か１名であった。一方、IIC３以下の軽度障害では、圧倒的に女性が多くなっている。

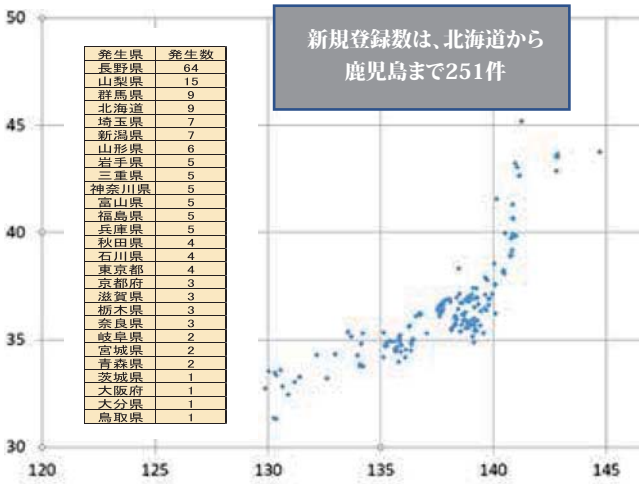
登山目的では、多くの人が単一目的ではなく、複合目的で参加している。死亡12人については、アルパインクライミングで１人、ヘリ墜落で１人、この２人以外は、すべて山歩きを目的とした事故である。その死亡要因は、滑落６件、道迷い２件となっている。

なお、疲労では、足膝によるものが多く、道迷いは、その後、滑落につながっているものが多かった。警察データでも62件の報告があった動物、昆虫の襲撃は、ここでも４件の報告があり、毒虫と報告されているが、詳細は不明。

登録事故発生山域について

登録事故は251件であるが、北海道から鹿児島まで発生しているため、緯度・経度座標でプロットしても、ある程度日本列島の形が浮き上がってくる。発生件数は警察庁統計データと同様、長野が突出するが、他は異なり山梨、群馬、北海道と続く。

多発山域は唐松岳、槍ケ岳、奥穂高岳と北アルプスが並ぶ。大部分は転倒、滑落で障害程度も中症程度の事故が大半を占める。死者が出た山域は北アルプスが半数を占めるが集中はしていない、他に三国連峰、八ケ岳などがある。

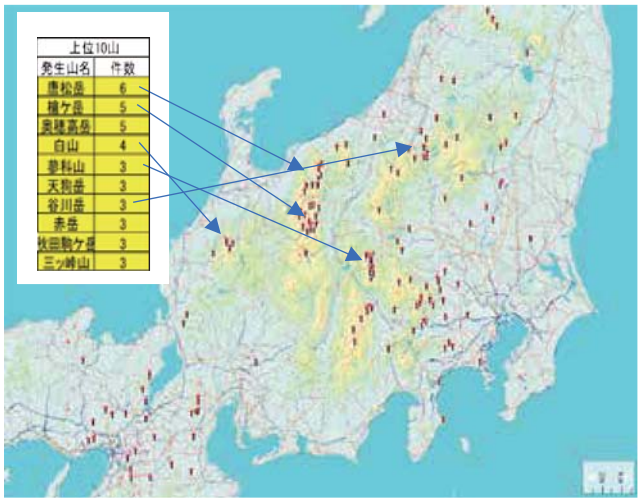


発生県	発生数
長野県	64
山梨県	15
群馬県	9
北海道	9
埼玉県	7
新潟県	7
山形県	6
岩手県	5
三重県	5
神奈川県	5
富山県	5
福島県	5
兵庫県	5
秋田県	4
石川県	4
東京都	4
京都府	3
滋賀県	3
栃木県	3
奈良県	3
岐阜県	2
宮城県	2
青森県	2
茨城県	1
大阪府	1
大分県	1
鳥取県	1

各県別新規データ 遭対専門家による講評

神奈川県：中丸

神奈川関連の事故データを拝見いたしました。多くが他県の山での事故報告になっています。今回のデータからも、経験豊富な60,70代の方の事故が多く見られます。これらは必ずしも疲労が蓄積するルート終盤に発生しているわけではなく、行動開始から中盤にかけて起きています。 登山者自身、ヒューマンエラーとして片づけてしまわず、加齢による体幹バランスの衰



えを自覚し行動することが大事に感じます

兵庫県；島添

1）70歳を中心に60～50代が多い。

2）ベテラン、経験値高い人が多い。

3）加齢による運動能力の低下。

4）対処はその自覚と山行のグレードを下げる。

この年代の方たちは強いが故にこれが難しい。

山梨県；安藤

山梨日々新聞に記事＜遭難死、山梨最多＞が掲載されました。驚きもありますが、高山より低山の方が、遭難が多く、関東近県から色々なレベルの登山者の来県が多い。データより、60.70歳代 低山 下山時 魔の時間帯 が多い気がします。

群馬県；町田

2019年度は18年比で遭難件数51件減、遭難者数63名減と3年ぶりに減少となった。年齢別では中高年が80％。内60歳以上が50％を占めている。山域は谷川、尾瀬に集中しており、遭難者内訳は80％が東京、埼玉、次いで神奈川といった県外からの登山者である。事故態様といては転倒、滑落が50％を占めており道迷いは18％にとどまった。特徴的なのは尾瀬での転倒による手足の捻挫、骨折が多いことで、果たしてヘリ搬送が必要なのか？　事故内容によっては遭難とは言えない事例が増えている。

山梨県で発生する深刻な事故分析

山梨県が死者・行方不明者31人と全国一になった。その背景には山梨において必ずしも大幅に深刻な事故が増加したわけではない。長野県の値が大幅に下がったことによる。本来は、長野がなぜ減少したのか、分析すべきであるが、資料が入手できないため、高止まりする山梨の現状について検討した。

山梨で死亡・行方不明に焦点をあてると、転落・滑落が19人、発病4，転倒、落雷、落石がそれぞれ1人、その他不明であった。この転・滑落の多さが、死亡率を高止まりさせている。

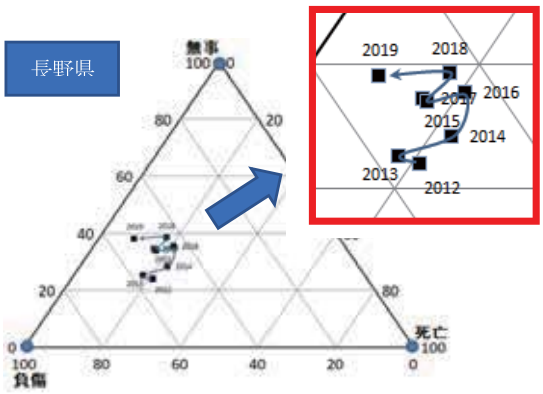
より詳しく踏み込むと、山菜採りから事故に至っているケースが5名もある。そこには、道迷い＋疲労＋発病／滑落といった複合要因による事故連鎖が想定できる。 多くは、「連絡が取れなくなり、捜査すると遺体が見つかった」単独行のケース（推定19）で、同伴者がある場合では、より詳しく事故の詳細が掴めている。

死亡率を下げるため、警察庁の呼びかけ同様、単独行を避ける運動が、効果的と考えられる。

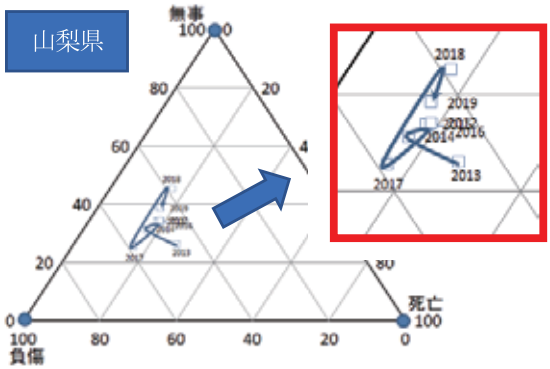
遭難死 山梨が最多

事故件数は3番目

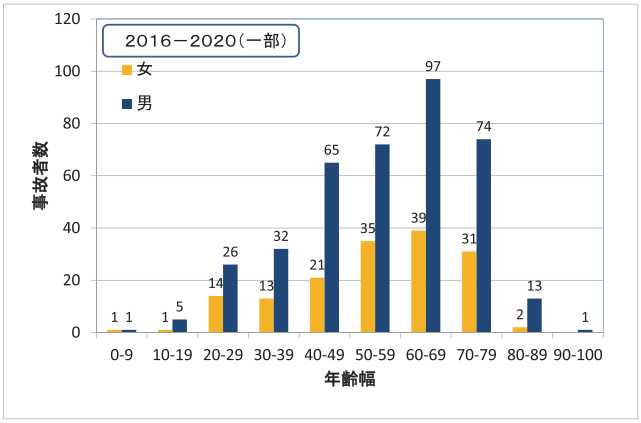
2019年に全国で発生した山岳遭難事故は2531件（前年比130件減）、遭難者は2937人（192人減）だったことが18日、警察庁のまとめで分かった。死者が2223人（75・7％）、「山菜・キノコ採り」が360人（12・3％）。都道府県別の遭難者は長野の290人が最多で、次いで北海道232人。

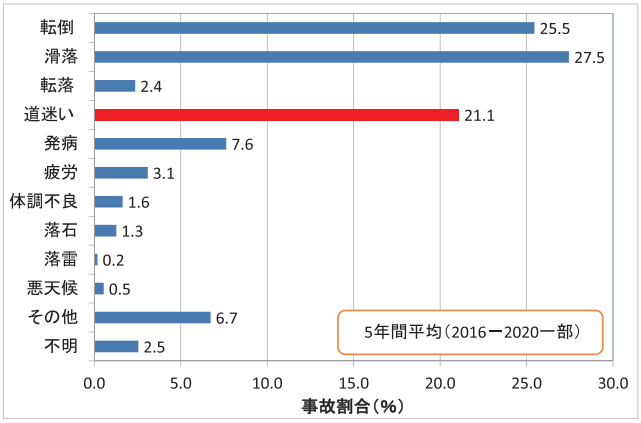


長野県は、遭難事故者数が常に全国一位を保つ登山観光県である。しかし、安全登山運動によるためか、経年変化曲線は、２０１２年より、深刻な事故を減らし、連続的に安全側にシフトしている。



山梨県も多くの山を有する登山県である。経年変化曲線は2013年の最悪事態からは改善したが、図のように巻いており、安全への方向性がまだ出ていないことを示している。





山梨県警データより：山梨県は典型的な登山県であり、その特徴が事故の性別年齢構成と事故態様に反映される。男女事故者では、図より明らかなように圧倒的に男性が多い。また、事故態様は道迷い（２１％）が少なく、転倒滑落が半数（５３％）を占める。特に、滑落が最も多いケースでは、死亡率も高くなる。

事故クラスターが発生する場所

コロナ災禍では、集団、群れを意味し、統計で良く用いられるクラスターという名称が注目された。この考えは、減遭難運動にも有効である。

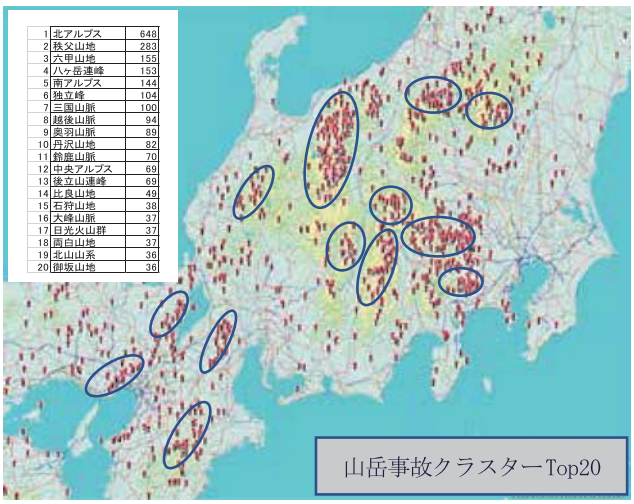
クラスターを山岳遭難事故に応用すると、事故者が多く発生する山域に該当する。事故は全ての山域で一様に発生するのではなく、特定の山域に集中するケースが多いからである。

山岳事故が多発しやすいクラスター条件は、

①人が多く集まる山域がある（美しい山岳景観、高い知名度、交通の便が良い、宿泊等施設の充実、取りつきやすさ、豊富な情報、有名ルートの存在、登山各世代の好みの山域がある）

②事故につながりやすい環境がある（険しい登山道、迷いやすい道、疲労しやすいコース、不安定な登山道と周辺地形、不安定な天候、クライミングの名所）などであろう。

これらの条件を満たすのが北アルプスである。登山者（高齢者を多く含む）に魅力的な場所で、山行を楽しむが、体力に見合わないコースで疲労し、判断力が鈍り、道迷い、転倒、滑落を引き起こす。その結果、クラスターが発生する。



障害程度から見た事故の発生状況

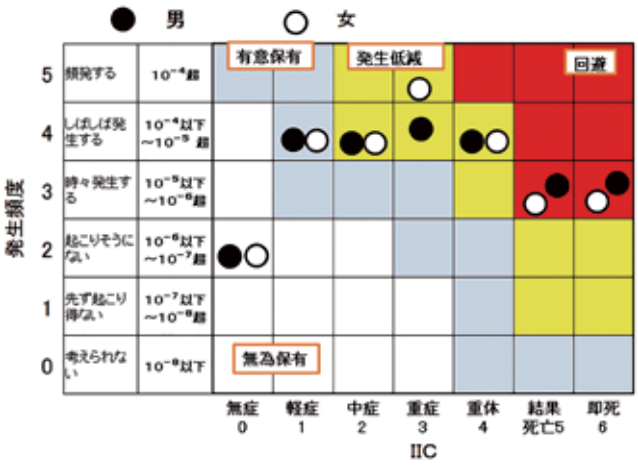
登録された山岳遭難事故の障害程度は、中症、重症が最も多く、全体の６６．８％を占める。重体～死亡が１５．１％である。男女別では、女性の障害程度が低く、男性は深刻なケースが女性より上回る傾向がある。

どのような障害程度の発生頻度が高いのか、危険性を検討するため、各障害の程度に応じて、その発生頻度を求めたリスクマップ（R-Map）を描いた。図はリスク対応上、最も回避しなければならない死亡領域の発生頻度が高過ぎることを示している。

障害程度と年齢 3,968人

	IIC Injury and Illness Classification 〈UIAA〉						
年齢	0無症	1軽症	2中症	3重症	4重体	5死亡	6即死
0−9		1					
10−19		1	4	1	2		
20−29		6	12	23	11	2	4
30−39		38	49	106	26	7	7
40−49	4	72	96	184	48	8	13
50−59	5	132	194	479	105	21	20
60−69	4	288	349	730	194	24	16
70−79	1	135	143	260	69	6	8
80−89		6	9	10	5	2	
不明		19		1	1	3	
総計	14	698	856	1794	461	73	68

事故時の年齢に対し、障害の程度IICを描いた山岳事故データベースのインデックスに位置づけられる表である。3,968中、深刻な事故だけでも602ケースが登録されている。

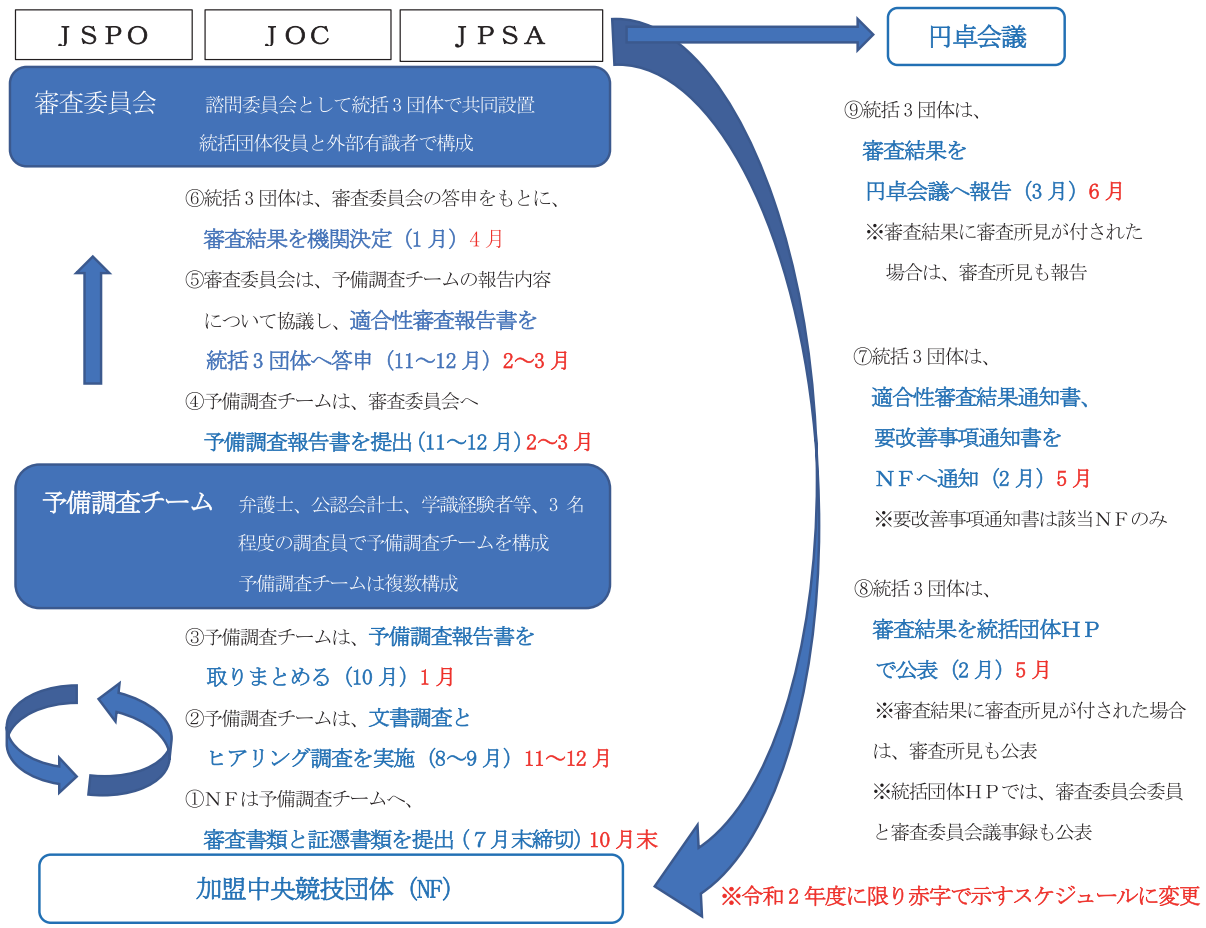


（青山千彰）

スポーツ団体ガバナンスコード（3）

スポーツ団体ガバナンスコードの適合性審査は、図1に示すスキーム及びスケジュール(①～⑨) に従って実施される。

＜図１＞スポーツ団体ガバナンスコード適合性審査　スキーム図



※NF と予備調査チームの間での審査書類のやり取りや、審査委員会の開催準備等、審査に係る事務手続きは、統括３団体が設置する審査委員会事務局が担う。

JMSCA

令和２年度
9月（第４回）理事会報告

日　時：令和２年９月10日㈭
14：10 ～ 16：40
場　所　オンライン会議
出席者　亀山・平山・丸各副会長、尾形専務理事、小野寺・水島・合田各常務理事、相良、蛭田、町田、村岡、村上、山口、水村、前田、六角、唐木、古賀、山本、古林、小日向、安藤各理事、中畠、古屋各監事
欠席者　八木原会長（膝手術入院中）

１．開　会

八木原会長が欠席の為、亀山副会長が会長代行となり、議長を務める。

事務局長から理事22名、監事２名の出席が確認され、事務局長がオンライン会議のホストを務めて議事に入った。

２．議　題

⑴議案第１号　議事録の承認について

①令和２年度第３回理事会議事録の承認について（事前送付済）

②令和２年度定時総会議事録の承認について（事前送付済）

上記２件については、異議なく承認された。

⑵議案第２号　アイスクライミング競技の扱いについて

今年度は従前通り選手選考には関わらず、国際大会の派遣手続きはサポートする。アイスクライミングを検討する会（仮称）を立ち上げて今後の対応を検討する。等が諮られ、提案通り承認された。

⑶議案第３号　補正予算について

①第８回ＬＹＣ 第２次補正予算について

ＬＹＣの１次補正に対し、372万円の補正で、総額1162万円の第２次補正予算が諮られた。

補足として第33回ＬＪＣと第８回ＬＹＣは、令和２年度当初予算で組んでいないため２大会合わせると1600万円の予算オーバーとなる。

富山、岩手と県によって違いはあるが、コロナ対策でどうしても余分に支出が増えてしまうとの補足があった。提案通り承認された。

②強化委員会補正予算

強化委員会からの補正予算案提出が前日だったため、予算委員会で精査してから次回の理事会に諮ることになった。

⑷議案第４号　ルートセッター研修会について

10月に南砺市で開催されるルートセッター研修会について諮られた。不特定多数が大勢集まるほど密にはならないとのことで、提案通り承認された。

⑸議案第５号　第59回全日大会・千葉大会の延期について

コロナ禍の現況を鑑み、(一社) 千葉県山岳・スポーツクライミング協会から延期の申し出があり、提案通り承認された。
令和３年度開催の新潟大会を第59回、令和４年度の高知大会を第60回、その次に千葉大会を第61回として開催する。

⑹議案第６号　参与の入会承認について三重県の原孝昭氏の入会承認が諮られ、承認された。

３．報　告

⑴報告第１号　令和２(2020) 年度８月・月次決算報告について
事業を実施していないので、当期経常費用が大幅な減額となっている。上期決算では、説明書を附す。

⑵報告第２号　ＣＡＳ審問結果について
８月26日に行われた審問について報告があり、仲裁判断は、12月10日までに出されるとのこと。

⑶報告第３号　ガバナンスコード（ＧＣ）自己説明及公表について
ＪＭＳＣＡのＧＣに関してはガバナンス委員会で手分けして対応しているが、一般向けＧＣ（各岳連）については未着手の状態である。

⑷報告第４号 ＧＣインテグリティ事業のオンライン説明会について
資料に基づいて報告があった。

⑸報告第５号　選手のＢＭＩ問題について
ＬＪＣでの決勝進出選手の実態調査に関して報告があった。

⑹報告第６号　アスリートパスウェイでの事故報告について
西条市で自主練習中にオートビレイのロープを装着しないで起こった事故について報告があった。

⑺報告第７号　第33回ＬＪＣの報告について（８月、盛岡）
コロナ禍での開催であったが、大会終了２週間後も感染者は出なかった、と報告があった。

⑻報告第８号　リード日本代表選手について
ＬＪＣが終わったので、資料に基づき報告があった。

⑼報告第９号　第８回ＬＹＣの開催について
10月10日～12日、南砺市での開催について状況報告があった

⑽報告第10号 各種支援金の受け取りについて
スポーツイベント再開支援事業、持続化給付金について申請し、交付された。家賃給付金については、後期に申請する予定。

⑾報告第11号 ＵＩＡＡ役員立候補、専門委員推薦について
ＵＩＡＡのManagement Committee委員（役員）に丸副会長、Medical Commissionフルメンバーに上小牧登山医科学委員会副委員長を推薦。
水村理事から追加でＡＣＣ役員推薦について報告があった。

⑿報告第12号　後援名義承認について
- 山岳・スポーツクライミングセミナー2020（広島）
- 第46回大阪府チャレンジ登山大会（大阪）
- 第40回日本登山医学会学術集会の日程変更

上記、３件の後援事業について報告。

⒀報告第13号　ＨＰ刷新経過について
資料に基づいてこれまでの経緯について報告があった。

⒁報告第14号 名称変更について
７月21日に一般社団法人千葉山岳・スポーツクライミング協会が誕生したことが報告された。略称は、ＣＭＳＣＡ（チムスカ）とのこと。

⒂報告第15号（一社）日本パラクライミング協会との覚書締結について
同協会への支援・協力について覚書を締結した。

⒃報告第16号　予算委員会開催について
次年度予算編成の前に予算委員会を開催して予算編成方針を策定。委員会構成は、次年度役員改選を踏まえて、常務理事会メンバーに相良・山口・六角理事を加えた構成とする。

⒄報告第17号　ユース代表選手強化活動及び、第５期オリンピック強化選手について
今期はユースの国際大会がないので強化活動内容を変更して行う。
オリンピック強化選手については今までのＳ，Ａランクに新たにＢランク選手（緒方良行、谷井菜月）を追加する報告があった。

⒅報告第18号　令和２年度山岳共済会第１次補正予算について
今年度はコロナ禍により加入者は昨年実績を大きく下回り、９月１日現在で45,030人。そのため第１次補選予算を組んで当初予算を修正した。ＪＭＳＣＡに対する事業委託費は600万円削減で3400万円になる。

⒆報告第19号 新規広報委員会常任委員について
水島委員長以下10名の常任委員について報告。

⒇報告第20号　2021年以降のマーケティングについて
12月で契約が切れる専任代理店との契約更新について経過報告があった。

㉑報告第21号　役員派遣について
（９月11日～10月12日）
①東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた新型コロナウイルス感染症対策に係る政府・競技団体間連絡会議　９月11日㈮　於：オンライン会議　尾形専務理事、小野寺常務理事
②スポーツクライミング・ジャパンツアー2020（Ｂ）　９月12日㈯　於：B-PUMP荻窪　宮澤委員長他
③スポーツ庁「スポーツ団体における女性役員の育成・マッチング支援」　９月17日㈭　於：オンライン会議　尾形専務理事、小野寺常務理事
④安全登山指導者研修会東部地区　９月19日㈯～21日㈪　於：福井県奥越高原青少年自然の家　丸副会長、水島登山部長
⑤スポーツクライミング・ジャパンツアー2020（Ｂ）９月26日㈯　於：プレイマウンテン名古屋ＩＣ　宮澤委員長他
⑥第８回リードユース日本選手権　10月10日㈯～12日㈪　於：南砺市桜が池ＣＣ　平山副会長、村岡理事

㉒報告第22号　受取寄附金について
創立60周年募金として頂いた大口寄附金を寄付者から借入金返済用に変更して頂いた。

㉓報告第23号　国体ロッククライミング学会の後援事業について
国体ロッククライミング学会の後援事業が１年延長になった。日程変更で再度申請して頂く。

㉔報告第24号　今後のクライミング大会についての日程案について
資料に基づいて現状案について報告が

寄贈図書

機関誌	(公財) 日本スポーツ協会	「JSPOスポーツニュース」「JSPOフェアプレイニュース」Vol.119
	大阪府立体育館	「季刊 府立体育館」No.134号
会　報	(公社) 日本山岳会	「山岳」2020年 Vol.115
	(公社) 日本山岳会	「山」2020年９月号 No.904
	(一財) 日本防火・防災協会	「地域防災」2020年８月号 No.33
	(特非) 日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.78
	(公財) 健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.509 202009
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第639号
	(公財) 日本スポーツ協会	「Sport Japan」Vol.51
	(公社) 日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」2020年９月 No.369
	長野県山岳協会	「やまなみ」No.238
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」10月号 No.548
	(公財) 京都府スポーツ協会	「京都府スポーツ時報」No.134
	常北山水会山岳部	「山水」第46号
	日本ヒマラヤ協会	「HIMARAYA」No.494
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.98 No.1087
	(一社) 埼玉県山岳・スポーツクライミング協会	「SMSCA」NEWS No.68
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.730
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第350号
雑　誌	(株) 山と渓谷社	「ＲＯＣＫ＆ＳＮＯＷ」Sept.2020 No.089
	(株) 山と渓谷社	「山と渓谷」10月号 No.1027
	(株) ネイチュアエンタープライズ	「岳人」10月号 No.880
新　聞	(株) 日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2300号、第2301号、第2302号

あった。

(25)自然公園指導員表彰について
本協会から推薦した菅野三知博、増子麗子両氏の表彰決定。

(26)その他
小日向理事からオリンピック選手選考に関して最近の大陸選手権の動きについて報告があった。

お詫びと訂正

『登山月報』9 月号（Vol.618）2 頁左下写真説明の「左から今井…」は、「今泉」選手でした。お詫びして訂正いたします。

表紙のことば

1984 年 9 月、マモストン・カンリの初登頂を狙ってタンマン氷河のＣ２からＣ３建設に向かった。氷河源頭から東稜に飛び出ると、チョング・クムダン氷河を挟んで美しいピラミダルな山容のチョング・クムダン（7,071 m）が眺められた。当時は無名峰であったため我々は、マモストン・カンリⅡ峰と称していた。

1991 年 8 月、英印合同隊がチョガム３氷河から西壁に取り付き、6,800 m付近で北西稜に出て初登頂に成功した。

（写真撮影者　尾形好雄）

編集後記

先は見えないが協会活動が再開され始めており、本誌にも活動報告が掲載されるようになった。

ＩＦＳＣスピードクライミング国際バーチャルイベントである。コロナ禍で練習時間が取れない状況での参加にＳＣの勢いを感じる。第 17 回山岳遭難事故調査報告書(1)は本文前段の如くコロナで登山活動がどの様に影響を受けるのか感染以前のデーター分析を行った様で、事故調査結果から、山行形態、年齢構成、事故要因による地域の傾向など、今後登山活動でのコロナとの共生はどの様な態様を示すか興味深い。　（広報担当　水島彰治）

JMSCA 60周年募金協力者ご芳名

（2020 年 9 月 30 日現在、敬称略）

２口：松代正範

（総額：1,127 口　5,635,000 円）

＊

創立 60 周年記念事業募金のご協力をお願いします。6,000 円以上の募金の場合、税額控除証明書を発行いたします。

みずほ銀行　渋谷支店　普通口座　3382501
口座名：
（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会
郵便振替　口座記号番号 00110-5-546693
加入者名：
（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会

トレランJAPAN
一般財団法人 日本トレイルランニング協会
〒141-0031
品川区西五反田６-３-23-205
☎03-3492-0355　FAX 03-6451-3767

登山月報　第 619 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和 2 年10月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
ＦＡＸ　03－5843－1635

山岳雑誌 岳人
山と人、時代をつなぐ「岳人（がくじん）」

11月号 発売中
【特集】山に潜む危険
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格880円(+税)

年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常価格12冊 ~~10,560円(税抜)~~ 11,616円(税込) → 年間購読なら12冊 9,680円(税抜) 10,648円(税込)　1冊分おトク！

年間購読特典

A4サイズが入る！
岳人トートバッグ
丈夫なコットン製でマイバッグとしても重宝します。
▶サイズ：幅36×高さ37×高さ11cm
全国1,800カ所以上でご優待！
岳人カード

全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP 電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。
あしたを作る。
三井住友海上

損害保険と聞いて、
なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

三井住友海上
時空保険
探査部
Space-time Insurance
Exploration Department

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397
E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
https://sangakukyousai.com

WEBからもお申込みいただけます